

Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO. 25

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN 2012. 12

◆ 韓国・中国・日本の簿記発展史(1786~1910)国際会議

2012年11月21日から同23日にかけて韓国・ソウル近郊にある韓国學中央研究院にて、韓国はもとより、中国、日本、ドイツ、英国から簿記史、商業史の研究者が集まり、朝鮮の四介松都治簿法を中心とした発展史が語られた。

韓国學中央研究院に付設された大学院大学の留学生が寝食を共にし、今回の国際会議の裏方を務めました。また同大学院教授 Jun Seong Ho(経済史)がチェアマンとなり会議を進め、韓国(3名)、中国(2名)、日本(3名)のセクション順に報告がなされた。これらの報告の翌日には、それぞれの報告に対してコメンテーターが批評し、これに対する報告者の答弁があった。

ヨーロッパから参加された方をはじめとして、漢字が読め、日本語・韓国語に不自由されない研究者がほとんどであった。なお、この会議は次年度に継続されることから研究成果が特に期待される。

韓国セッション

Jun SeongHo: 「開城簿記の視座(1786~1919年の間のヨーロッパと比較して)」

Jung Key Suk: 「開城簿記とその会計帳簿の構造」

Huh Seong Gwan: 「19世紀の朝鮮複式簿記記録の会計サイクルについて」

中国セッション

Li Xiao Lin: 「三脚帳簿記法が一種の複式簿記であることと四介松都治簿法の歴史的貢献」

Nanny Kim: 「中国の会計技術—歴史的考察」

日本セッション

三代川 正秀 「江戸時代の和式簿記の方法」(拓殖大学)

徐 龍達 「江戸—東京時代の帳合(出雲と近江の社会的背景を中心として)」(桃山大学)

James B. Lewis 「(日本語の影響を受けた)玄丙周著『実用自修 四介松都治簿法全』の翻訳について」(オクスホード大学)

(文責:三代川 正秀)

◆ 岩井 敏先生の思い出

拓殖大学 三代川 正秀

24年前の冬のことです。日本公認会計士会協会の副会長を務められた岩井敏先生から電話がありました。ちょうどそのころ、雑誌『企業会計』（1990年11月号、同12月号）に「ルカ・パチョーリを訪ねて」という旅行記を寄せたときでした。初対面の岩井先生から電話をいただき、この記事を読んだことが告げられました。その先年、日経新聞(87.12.4)の文化欄に先生が寄せた「会計の父パチョーリを追う一偉大なイタリアの先達にあこがれ研究20年―」を思い起こし、カポディモンテ美術館(Galleria Nazionale di Capodimonte, Naples)蔵の「パチョーリとウルビーノ侯」(Portrait of Luca Pacioli with Guidobaldo di Montefeltro)の写真を分けていただきたいと、恐る恐る願い出ました。それから数ヶ月ほど経って、日比谷国際ビル(内幸町)にあった太田昭和監査法人に先生をお訪ねし、肖像画「パチョーリとウルビーノ侯」の写真額装を頂戴しました。そのうえ、お昼をともにさせていただいたのが先生とのご厚誼の始まりです。その後数回この事務所にお伺いし、そのつどお昼を御馳走になりました。

1992年に京都国際会議場にて、第七回会計史家国際会議(The World Congress of Accounting Historians)があり、獨協大学の百瀬房徳先生を介して先生のお隣に座ったことがありました。外国からの参加者も多いことから、能舞が披露されました。舞台を鑑賞しながら私に「若い頃に能(謡い)の世界に魅せられていたので、あの頃のことを思うと会計士の仕事についていなかったかもしれない」と言われたことがありました。今にして思えば、能面の表情が、ヴェネツィアのカーニバルに登場するマスケラに似ているように思えます。先生の趣味にプロ並みの写真技術があります。手元に岩井敏写真集『ヴェネツィア残光―春を待つころ―』(遊人工房2004.6)と同『マスケラの夢 ヴェネツィア』(遊人工房2005.11)の出版や2008年2月に渋谷の区立松濤美術館で主催された「マスケラの夢 ヴェネツィア」写真展の図録が残っています。

その『ヴェネツィア残光』の巻頭には「ルネッサンスの昔、1494年11月、ヴェネツィアに於いて数学書”Summa”が印刷本として発行された。著者の名はLuca Pacioli、Summaは現存する最古の複式簿記書として知られている。会計を職業とした私にとって、ヴェネツィアは特別の街である」と書かれていました。また、松濤の写真展カタログには先生が写真の虜になった経緯と「マスケラの夢に寄せて」という紹介文があります。

カーニバルの季節、ヴェネツィアには多くの人が集まります。サンマルコ広場に通じる路地は、ときには押し寄せる人の波で渋滞におちいります。毎年、それぞれ想いを練り着飾った仮面の人びとによって、ヴェネツィアは華やかさと、えも言われぬ妖艶な雰囲気醸し出されます。仮面の人の顔は定かでないのに、^{おもて}面の一瞬は被る人の内面を見せてくれます。カーニバルのあと、四旬節を経て、ヴェネツィアはイースターを迎えます。

1996年5月18日、開業間もない新宿リーガロイヤルホテルで、ランチをはさんで日本パチョーリ協会のフォーラムが催され、「ルカ・パチョーリをめぐる人びと」の御講演を先生がなされました。

私がルカ・パチョーリに関心をもつようになった動機は、1967年9月、パリで行われた第9回国際会計士会議の帰途、表敬訪問したイタリア会計士協会より提供されたパチョーリの肖像画写

真が切っ掛けである。…パチョーリの生涯について調べ始めたのは、その年の晩秋であった。資料の蒐集が進むうちに、ジョルジョ・バザーリ (1511~1574) の論述した剽窃論が私の眼に止まった。…バザーリの見解は私に強烈な印象を与えるとともに、俄然パチョーリに対する私の関心をかきたてた。もし、このときバザーリの剽窃論が目に触れなかったとしたら、私はパチョーリにさほど興味を覚えなかったかもしれない。

と先生のパチョーリ研究の動機を述べ、次いで、パチョーリ生誕の地イタリア・サンセポルクロ訪問について話されました (AAA 誌 No. 10, 1996. 12、片岡他編『我が国パチョーリ簿記論の軌跡』雄松堂収録)。

最初の訪問は 1973 年の 5 月、新緑の季節であった。片岡泰彦・中西旭両先生の紀行文を参考にした一人旅であった。美術館、図書館、パチョーリ中学校等をコマンドッチ博士の案内で見学した。2 度目の訪問は 1975 年 10 月、妻を伴いパチョーリ縁の地を訪ね歩いた結婚 20 周年記念旅行の折であった。…3 度目のサンセポルクロ訪問は、1987 年 8 月、盛夏の季節であった。…4 度目の訪問は、1994 年 4 月「スママ」出版 500 年記念祭がヴェネツィアにつづきサンセポルクロで行われたときであった。

1994 年 4 月 9 日から 12 日にかけて「スママ出版 500 年周年祝賀特別会議 (Convegno Internazionale Straordinario per celebrare Fra`Luca Pacioli)」がヴェネツィアのジュディッカ島で開かれ、その会議のオプション・ツアーにサンセポルクロへの一泊旅行があつて、ご一緒した折のお元気な奥様のお姿や先生のすてきなブルーのブレザー姿が印象に残っています。

日本パチョーリ協会の講演では、①ピエロ・デッラ・フランチェスカは日本ではあまり知られていない画家であるが、熱烈なファンが日本にもいること、②パチョーリ肖像画を描いたとされるヤコボ・デ・バルバリについて「絵画は少ないが、ミュンヘン美術館には『狩りの獲物』を描いた優れた静物画がある」こと、そして③パチョーリ肖像画右下方部に描かれた紙きれにこの絵の「制作年を表す 1495 のうち、末尾の 5 の数字は黒い染み(?) のため全く判読不能であった。その後 1989 年 1 月、再度訪問したカポディモンテ美術館で、私は染みの範囲が狭くなって、5 の数字が小さめに書き込まれたこの絵をみて驚いた記憶がある。この部分についてはテラーも特に指摘しているように昔から不自然だった箇所」だという。そして④「通説によればパチョーリ肖像画に画かれた若者は、グイドバルドであると云われているが、グイドバルドは真正面から画いたラファエロ作と伝えられる肖像画がウフィツィ美術館にある。私はウフィツィでグイドバルドと公妃とエリザベッタ (1472~1524) の肖像画が並んで展示されているのを 1975 年に見ている。しかし、その後、数回、訪れた同美術館では、両作品とも展示から外され鑑賞することはできていない」と指摘しておられた。

この肖像画については別稿に「ルカ・パチョーリの肖像画」(日本公認会計士協会、『JICPA NEWS』221 号 (1976. 2) やナポリのカポディモンテ国立美術館を訪ねた折の「ルカ・パチョーリの肖像画を訪ねて」(日本公認会計士協会南九州会『アカントピア』16 号 1976. 9) の紀行文もある。すなわち、こう書いている。

7 号室から 8 号室に歩みを進めると私の視界の正面にこの絵が入ってきた。それまで長い間私の到来を待っていたかのように感じられた。幾歳月待望久しい絵である。法衣をまとい、ユークリッド (幾何学) を説明しているとおもわれる姿は謹厳な偉丈夫である。歳既に 50、数学者としての彼の名は前年 (1494 年)、数学書「スママ」を世に出したことにより、いやが上にも高ま

っていた。しばしの間、私はパチョーリと対峙した。……パチョーリの肖像画を撮影しようとした頃、陽射しがあやしくなってきた。薄雲がかかり始め窓からの採光が充分でなく、それでもとも暗色基調のこの絵の撮影条件は次第に悪くなってきた。いわば「執念」で撮ったのがこの写真「パチョーリとウルビーノ侯」である。

当時の随筆にこのほか次のものがある。

<随想>「ルカ・パチョーリをめぐる人びと」税務研究会『国際税務』Vol. 4/5(1984. 5)pp. 16-17.

<随想>「その後のパチョーリ 記念碑—三たびサンセポルクロを訪ねて—」

税務研究会『国際税務』Vol. 8/1(1988. 1)pp. 9-10.

<談>「風のサンダルを履いた旅人—再生するルカ・パチョーリ」

Nile' s Nile No. 3, 1996年4月号 pp. 26-27.

<随想>「ある数学者」『交詢雑誌』No. 522、2008年11月号 pp. 2-4.

<講演録>「ある数学者」『颯田通信』第4巻30号(2011. 3. 5)

<担当>「ルカ・パチョーリ」日伊協会監修『イタリア文化事典』(丸善 2011. 12)

日本パチョーリ協会は江村稔、片岡泰彦、久野秀男、佐々木重人、西中旭、茂木虎雄らが集い1992年に設立されましたが、先生は当初から参画され、フォーラムを毎回楽しみにされていました。初代の顧問を立教大学名誉教授の茂木先生に、そして2008年からは岩井先生にお願いしたところ、会のいく末を案じられ、公認会計士の方々をお誘いいただきました。また先生が苦勞されて撮影されたカポディモンテのパチョーリ肖像画写真を協会のロゴ制作のためお借りしたことがありました。この原画を三原色に分解する際に、フィルムに傷を残してしまったことが、返すがえすも先生に申し訳なく思っています。

戦後の職業会計人制度の揺籃期、1954年に第四回税理士試験合格(登録番号7250)並びに公認会計士試験二次に合格、1957年に三次試験に合格(登録番号1313)され、日本の会計士制度の確立期を協会の役員として携わってこられました。壮年時に東京大学の諸井勝之助、江村稔先生らと大蔵省企業会計審議会委員や日本公認会計士協会の要職を務められ、またロータリー日本財団の理事長や日本国際社会事業団理事長、颯田医学奨学会の理事など社会奉仕に半生をささげられて来られました。

この二十年の間は幾重もの大病を乗り越えられてきました。5月末に颯田医学奨学会の集いがあり理事長の古田直樹自治医科大学教授から、5月の中旬に入院された岩井先生が重篤だとお聞きし、築地の癌研究センターを訪ねました。遠くにベイブリッジの見える明るい病室で、やせ細られ酸素マスクをつけた先生と面会しました。イタリアで一緒したときに着こなされていた服装についてお話ししたところ、そのことを鮮明に覚えておられ、数年前にお亡くなりになられた奥様と同伴された楽しいご旅行だったとお聞きしました。

2012年7月16日にご逝去(享年84歳)、8月26日に新高輪のグランドプリンスホテル新高輪にてお別れの会がもたれました。先生が育ててこられた翔税理士法人与公益財団法人ロータリー日本財団の会長千玄室氏が主催され、ゆかりのある二百人ほどがお別れを惜しみました。

病の痛みから解放されたいま、サンセポルクロの街でルカ・パチョーリを取り巻く人々、ピエロ・デラ・フランチェスカ、レオナルド・ダ・ピンチ、レオン・バチスタ・アルベルティ、ガイドバルド・ダ・モンテフェルトロ、ジョルジョ・バザーリらと車座になって楽しく語り合っておられることでしょう。



松濤美術館「マスクエラの夢 ヴェネツィア」写真展図録から

◆ ルカ・パチョーリ

日本パチョーリ協会顧問 岩井 敏

日伊協会監修『イタリア文化事典』

[丸善出版(株) 2011]より

● パチョーリ肖像画

ナポリ民謡で知られているナポリのサンタルチア海岸から、繁華街ローマ通りを抜けて、5kmほど登った丘の上に、国立カポディモンテ美術館がある。この美術館が所蔵する作品のひとつに《ルカ・パチョーリ修道士と青年の肖像》と名付けられた絵がある。この絵はヴェネツィア生まれの画家ヤコポ・デ・バルバリ（1450—1515頃）によって、1495年に描かれたものといわれている。暗色基調のこの絵のモデルは、前年11月、数学書『スムマ』を出版した聖フランチェスコ会所属の修道士で数学者のルカ・パチョーリである。幾何学の図面を前にして立つ、齢50頃の心身ともに充実した偉丈夫の姿がバルバリによって、いきいきと描かれている。

● 生地ボルゴ・サンセポルクロ

ルカ・パチョーリは1445年頃、中部イタリア、アペニン山麓の盆地、ボルゴ・サンセポルクロに生まれた。父の名はバルトロメオ、パチョーリ一家は、やや低い中流の家柄であったと伝えられている。ボルゴ・サンセポルクロは10世紀頃、エルサレムからきた巡礼によって拓かれた集落で、1244年には人口3,293人を数える村にまで発展した。その後、複数回にわたる地震とペストによって、村は壊滅的な打撃を受け、その都度人口の激減をみたが、着実に回復してきた。現在のサンセポルクロ市は、トスカーナ南部の地方都市として、人口15,700人弱の落ち着いた文化の香り高い姿をみせている。部厚い石壁の外側に開発された新市街地は、著名なパスタ会社、モダンな設計の教会、近代的なショッピングセンター、その他新しい感覚で造成された街が展開している。サンセポルクロの名は、ルネッサンス美術の愛好者にとっては、ピエロ・デッラ・フランチェスカ（1412—92）の生誕地として知られており、毎年、多くの旅行者が私立美術館やピエロの家を訪れている。

● 師ピエロ・デッラ・フランチェスカ

パチョーリは少年期より、同郷の画家ピエロ・デッラ・フランチェスカから数学の教えるを受ける幸運に恵まれた。ピエロはルネッサンス中期の高名な画家で、遠近法絵画に幾何学を駆使した数学者でもあった。我々は今日、幸いにもサンフランチェスコ教会（アレツォ）、サンセポルクロ美術館、ウフィツイ美術館（フィレンツェ）、マルケ美術館（ウルビーノ）、ナショナル・ギャラリー（ロンドン）、その他でピエロが描いた秀作を鑑賞することができる。パチョーリは師のピエロに伴われて、遠くウルビーノの文庫にも通ったと伝えられている。当時、アドリア海に近い丘陵に築かれた城塞都市ウルビーノは、武人で文人の誉れ高い領主フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ（1422-82）によって治められていた。サンセポルクロからウルビーノへの道は、険しい地形のアペニン山脈を登りきり、あとはいく重にも、うねるように繰り返す丘陵の見はるかす彼方 80km に近い道のりである。領主フェデリコが巨費を投じ、力を入れて整備した宮廷内の文庫は、他に類をみないほど優れていたといわれている。師に伴われ、ウルビーノの文庫に出入りできた若き日のパチョーリは、ここで貴重な文献をさぞ耽読したことであろう。

● ヴェネツィアの家教師

パチョーリは 20 歳に達した頃、ヴェネツィアの大商人アントニオ・ロンピアジの 3 人の息子の家庭教師を務めることになる。師ピエロとの関係から、家庭教師の職は、レオン・バチスタ・アルベルティ（1404-72）の紹介であろうといわれている。アルベルティは貴族階級に属し、若い頃より万能の天才ぶりを認められていた著名人である。体操の名手であり、物理学、数学に秀いで、建築論、絵画論、彫刻論など、多くの優れた理論を著している。特にアルベルティの絵画論は、ピエロ・デッラ・フランチェスカ、ロレンツォ・ギベルティ（1378-1455）、レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）に影響を与えたと伝えられている。ヴェネツィアにおける 6 年間の生活は、パチョーリにとって、数学者としての人と成りにきわめて重要な意義のある期間であった。当時のヴェネツィア商人の商業活動の実態をつぶさに観察し、勉強することができたし、また著名な数学者ドメニコ・ブラガディノの教えることもできたと伝えられている。

● 修道士・数学者への道

ヴェネツィアでの 6 年間を終えたパチョーリは、ローマのアルベルティの邸に住みこむことになる。アルベルティの邸の生活は、パチョーリに上流階級の人々と接する機会を提供した。しかし、その期間は長くは続かなかった。1 年後（1472）にアルベルティが急逝したことにより、パチョーリは、聖フランチェスカ会（コンヴェンツァリ派）の修道院に入り、聖職者としての道を歩むことになる。1475 年ペルジア大学に新設された数学の講座を担当するため、ルカ・パチョーリ修道士が招かれ講義を行った。当時、数学はまだ神学の一部と考えられていた。その後のパチョーリは、ペルジア大学をはじめ、フィレンツェ、ローマ、ナポリの大学でも教鞭をとっている。また、修道士としての活動も活発に行ったため、必ずしも平穏なときばかりとはいえなかった。

● 数学書『スママ』の出版

1494 年 11 月、ヴェネツィアにおいて、パガニーノ・デ・パガニーニ社より数学書『スママ』を

出版した。『スُمマ』は最も初期の段階での印刷本として、いまでも世界に何冊かが現存している。この本の中でパチョーリは、当時のヴェネツィア商人が用いていた複式簿記の説明をしている。財産目録に始まり、日記帳、仕訳帳、元帳の説明は500余年を経た現在、なお世界中の企業や団体をはじめ会計のあらゆる分野に脈々として継承され活用されている。ルカ・パチョーリを「会計の父」とよび、『スُمマ』を「現存する最古の複式簿記書」とよぶゆえんである。パチョーリは『スُمマ』の冒頭にウルビーノ公への献辞を呈している。名領主フェデリコはすでに亡く、ウルビーノは息子グイドバルド・ダ・モンテフェルトロ（1472–1508）の時代となっていた。グイドバルドは生来、病弱の体質であった。傭兵将軍の跡継ぎながら、その務めを果たせなかったといわれている。しかし、その反面、辺境の地ウルビーノに父の跡を継いで人文主義的な典雅な宮廷をつくりあげた文人領主としての逸話は、数多く残されている。カポディモンテ美術館所蔵の《パチョーリ肖像画》の若者のモデルは、通説ではグイドバルドであるとされている。グイドバルドについては、ウルビーノ出身の画家ラファエロ・サンツィオ（1483–1520）が描いたとされる肖像画がウフィツィ美術館にある。この二つの絵に描かれた青年の風貌を比較すると、同一人物とするには疑問が残る。

● 親友レオナルド・ダ・ヴィンチ

『スُمマ』が出版され、世に広まった頃、ミラノの宮廷に仕えていたレオナルド・ダ・ヴィンチは『スُمマ』を読んだといわれている。レオナルドの遺稿には『スُمマ』の一部が転写されている。1496年よりパチョーリはミラノに住むことになる。ミラノの宮廷においてパチョーリは多くの著名人と接することができた。なかでもレオナルドとの関係が深く、多くの逸話が残されている。レオナルドはパチョーリから、よく数学を学び、またパチョーリが後に出版した数学書『デヴィナ』の正多面体の挿図はレオナルドに描いてもらったといわれている。ミラノにおけるレオナルドとの親交は1499年末をもって終わる。フランス軍の侵攻による領主ルドヴィコ・イル・モーロ（1451–1508）の失脚を前に、パチョーリはレオナルドと一緒にミラノを去ることになる。

● 晩年のパチョーリ

1500年代に入ってパチョーリの活動は、フィレンツェ大学、ボローニヤ大学、ピサ大学での講義で終わっている。学者としての記録は、1514年のローマ大学における講義で終わっている。一方、聖職者としての地位は必ずしも安定・平穏とばかりとはいえなかった。1510年にはサンセポルクロ、聖フランチェスカ会修道院の総長代理の要職に就任したが、トラブルが散発し、必ずしも穏やかな晩年とはいえなかった。パチョーリが逝去したのは1517年のことである。墓所はあきらかではない。

● パチョーリ剽窃論

パチョーリが世を去って33年が経過した。アレッツォ生まれのジョルジョ・ヴァザーリ（1511–74）が『美術家列伝』を世に出した。ヴァザーリは同書の「ピエロ・デッラフランチェスカ」の冒頭および中間の2カ所において、パチョーリは師ピエロの学問的業績をあたかもみずからの研究成果であるがごとく、偽って数学書を出版した不屈きな人物であると糾弾した。世にいう「パチョーリ剽窃論」である。

● パチョーリ記念碑

1878年ボルゴ・サンセポルクロの人々は、郷土の先人ルカ・パチョーリを讃えて記念碑を作成した。この記念碑は、現在の市庁舎（17世紀のラウデイ館）入口、向かって右側の外壁にはめ込まれている。大理石の記念碑には要約つきの碑文が深く彫り込まれている。すなわち、パチョーリがレオナルド・ダ・ヴィンチおよびレオン・バチスタ・アルベルティと親交があったこと。代数・幾何学の研究応用に偉大な貢献をしたこと。複式簿記を発見し、数学の諸著作により後世に不変の基礎と規範を提供したことが記されている。そして、末尾に、この記念碑は職人組合の発起により、370年間の忘却を恥じ、偉大な同郷人のために、サンセポルクロの住民が制作したものであることが明記されている。

● 学問に王道なし

1942年、シンシナティ大学のエメット・テーラー（1889-1956）教授は、ルカ・パチョーリの伝記を世に出すにあたり、その本の題名を『No Royal Road』とした。この題名は紀元前の逸話に由来している。すなわち「古代エジプトの王プトレマイオス1世が、数学の師であるユークリッドに幾何学を簡単に極める方法について尋ねた。ユークリッドは学問を究めるのに王道——易しい方法——はないと答えた」。学究者パチョーリの生涯を語るのに No Royal Road という言葉ほど適切な表現はほかにない。

● 『スママ』出版500年

1994年4月、『スママ』出版500年を記念して、ヴェネツィアとサンセポルクロにおいて、記念行事が開催された。ヴェネツィアにおいては、イタリア会計史学会が中心となり、ジュディッカ島のジッテーレ教会会議室を主会場として研究会が行われた。次いで、サンセポルクロにおいては、市立美術館のホールで、市長主催の式典が、翌日はダンテ劇場において数学の研究会が開催された。寒い日が続いた数日間であったが、特にヴェネツィアのサント・ステファノ教会における音楽の前夜祭は印象的であった。冷たい夜のしじまの中を流れてくる静かな旋律は、あたかも500年の時を超えて、語りかける数学者ルカ・パチョーリの声にも似て感じられた。先人に対する限りない畏敬の念に満たされた一夜であった。

参考文献

- [1] 鈴木弥洲平、中西 旭他『ルカ・パチョーリの生涯』 日本ミロク票簿、1977
- [2] R. Emmett Taylor, No Royal Road, The University of North Carolina Press, 1942
- [3] 平井泰太郎『「ぱちおり簿記書」研究』 神戸会計学会 1920
- [4] 片岡義雄『パチョーリ「簿記書」の研究』 森山書店 1956

上記以外の参考文献は「日本パチョーリ協会 HP」参照